

北陸建設界の担い手確保・育成 推進協議会について

国土交通省 北陸地方整備局 企画部

1 はじめに

キーワードは、「誇り」「頼もしさ」「楽しさ」である。わが国の人口は平成60（2048）年には1億人を割って9,913万人となり、平成72（2060）年には8,674万人になるものと推計（国立人口問題研究所）されており、若者の入職者の減少に伴う担い手不足が懸念されている。

とりわけ、北陸地方における建設界においては、全国や他産業と比較しても、将来の担い手確保・育成が喫緊の課題となっているが、われわれ建設界は将来にわたり地域を支え、人々の生活や暮らしを支えていかなければならない。そのような中で、われわれ建設界が持つ使命や魅力がどのようにすれば、若者に伝わるのか、それがまさにこの三つのキーワードなのである。

2 北陸建設界が直面している現状

北陸地方における建設界では、少子高齢化の進展や労働人口の減少に加え、近年の建設投資の大幅な減少による受注競争の激化等により、建設業者数（平成25年度末）は、約2.1万業者とピーク時（平成11年度末）から約20%減少し、建設業就

業者数（平成25年平均）は、約8.4万人とピーク時（平成12年平均）から約46%も減少している。

また、北陸の建設業就業者のうち50歳以上が約35%、29歳以下が約15%と全国と比べても高齢化が進展しており、とりわけ離職者の増加や若年入職者の減少等の厳しい状況に直面している。

これらの状況の背景には、安定的な事業量の確保や労働環境の改善等の課題が考えられるが、加えて、これまで建設界の持つ魅力を建設界全体として発信することや建設界に対する好印象を醸成することを、うまくできてこなかったことが主因の一つと考えられる。

3 協議会の設立主旨

このような現状が続けば、将来にわたる社会資本の整備・維持管理およびその品質確保や、冬の除雪を含む災害時の対応等を通じた地域の維持等に支障が生じることが懸念される。そのため、北陸地方における建設界の担い手をめぐる現状や課題に関する認識を共有し、建設界の担い手不足に対し、建設関係団体、教育機関、関係行政機関等が一体となって担い手の確保・育成の取り組みを推進することを目的とした『プラットフォーム』として、「北陸建設界の担い手確保・育成推進協議会」を平成26年10月に設置したところである。

表一1 参加機関一覧

産	日建連北陸支部 建設業協会（各県）	建設コンサルタンツ協会北陸支部 測量設計業協会（各県）
	新潟大学 富山大学 金沢大学 長岡工業高専 工業高校（各県）等	長岡技術科学大学 富山県立大学 金沢工業大学 石川工業高専
官	北陸地方整備局 労働局（各県）	新潟・富山・石川県、新潟市 教育委員会（各県）
※平成26年10月3日時点（今後も適宜追加予定）		

また、各地域における具体の取り組みを進めるに当たっては、新潟、富山、石川県部会をそれぞれ12月中旬に開催し、具体の議論や取り組みを進めているところである。

4 協議会における取り組み方針

冒頭にも述べたが、若者に建設界に安心して入職し、大いに活躍してもらうためには、どのようにすればよいのか。当協議会においては、「誇り」「頼もしさ」「楽しさ」、この三つのキーワードを掲げ、取り組みを進めることにしている。

まず、「誇り」とは何なのか。かつては海だった新潟平野は、腰まで泥に浸かる大湿地帯であり、度々洪水にも襲われた。そこを流れる信濃川に大河津分水路が造られ、今や肥沃な新潟平野が形成されたのである。さらには北陸道や新潟バイパス、新潟港などが整備されたことにより、人口80万人を超える日本海側唯一の政令市にまで発展を遂げてきたのである。今の若者にとっては当たり前前の光景が当たり前ではない「地域のものがたり」について知ってもらうことが大切である。

二つめは、「頼もしさ」である。それはまさに現場等の第一線で働く親の姿であり、先輩の姿である。例えば、現場見学会などでは大きな構造物や先進的な工法について説明することはあっても、そこで働く現場代理人や監督員等の方たちがどのような思いを持って仕事をしているのか、焦点を当てて説明している事例はまだ少ないのでは

ないだろうか。まさに第一線で働く先輩たちの生き様こそが頼もしさなのである。

三つめは、「楽しさ」である。われわれの仕事の原点は、やはりものづくりである。自らの頭で考え、自らの手を動かし、実際にものを造ってみる。その面白さや楽しさを是非とも感じてもらいたい。

5

協議会における意見や学生からのニーズ等

協議会においては、関係機関から持ち寄った効果的な取り組みを共有することはもとより、教育機関はじめ関係機関からはさまざまな意見や学生のニーズ等が共有されており、一部について紹介させていただく。

(1) 講義・授業での協力

- ・学生は、建設界の実態を知らないため、より現場に近い経験や知識を学校の授業科目において紹介をしてほしい。
- ・測量や積算など、近年の技術開発に学校の現場がついていっておらず、学校教育における先端技術等の提供や協力をお願いしたい。

(2) 現場見学、体験学習

- ・現場見学会は、実施者の都合で日程を決めることが多く、講義日程が合わない。進捗状況や現場見学の受け入れ確認できるサイトがあると、見学時期などの計画が立てやすい。
- ・現場見学会は、単なる見学ではなく、大学で学習している内容とリンクした事前の技術説明、解説が欲しい。

(3) インターンシップ

- ・インターンシップは、学生個人の適性等を確認する貴重な機会であり、短期間でなく長期間や複数業種の体験がよい。

(4) 土木系学生確保のためのアプローチ

- ・ 学生は入学して、1～2年生の段階で建設界への理解を深める。
- ・ 学校によっては入学時に専門が決まっておらず、進学振り分け時に、産官のサポートがあるとよい。
- ・ 学生は、両親の影響を受けやすく、両親の理解を深めることが重要。また普通高校の先生方も建設界についての知識はほとんどなく、先生方の理解を深める必要がある。

6

北陸建設界におけるこれまでの取り組み

前項で紹介した意見やニーズ等も踏まえ、本協議会における新たな取り組みについていくつか紹介する。

(1) 地域のものがたり講座

富山大学の教養科目の授業として理系・文系学生39人を対象に、出前講座（地域のものがたり）を実施。講座では、100年を超える大事業として常願寺川や立山砂防、江戸時代から続く親不知における道の整備など、社会資本整備の歴史的な物語を説明し、「一番安全な県だと思って安心して暮らしてきたが、砂防や河川改修がされたおかげだと分かりました」といった声が寄せられ、改めて社会資本整備の大切さに気づいてもらうことができた。

(2) 先輩から学ぶ現地見学会（反転授業）

金沢工業大学環境土木科1年生77人を対象に、開通へ向けて最盛期の能越自動車道の現場見学会を開催し、学校のOBである国土交通省職員等が案内役としてプロジェクトの進め方や情報化施工等を見学し、盛土材料を使った現地学習等も実施した。

今回の特徴は、現地見学に先立った授業において、学生に課題を与えて自ら勉強し、問題意識を持って現地に臨んだところであり、学生たちから活発な質問が飛び交うなど、興味を持って積極的に学ぶ姿が見られた。



写真1 現地学習に臨む学生たちの様子

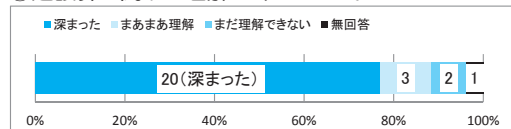
(3) 教員や両親を対象にした意見交換会

産学官（建設関係団体・学校・国等）が連携し、新潟工業高等学校土木科の保護者を対象に、現場見学会と同校の卒業者等で建設業に携わっているOBとの意見交換会を実施した。保護者から

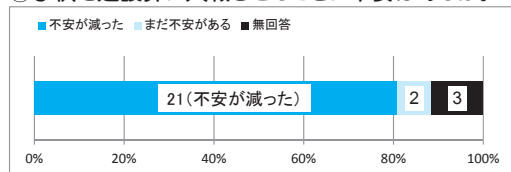


図1 地域のものがたりの一例

①建設界に関する理解が深まったか。



②子供を建設界に入職させることに不安はあるか。



図—2 保護者からのアンケート結果

のアンケートでは、約8割の方が建設界に関する「理解が深まった」と回答し、また建設界に入職させることについて約9割の方が「不安が減った」との回答をいただき、予想以上に建設界への理解を深めていただくことができ、主催者として手応えを感じることができた。

7 今後に向けた新たな提案

協議会においては、「誇り」「頼もしさ」「楽しさ」を感じられる取り組みを具体的に進めるため、まず、建設系の学生へは、建設関係団体や関

係行政機関等における技術力や建設現場のフィールド、資機材を提供するなど、現場見学会やインターンシップの充実に加え、教育機関における学内実習や講義等の連続講座を開設するなど、カリキュラムの充実を図ることとしている。

また、建設系学生の子供を持つ両親や普通高校・中学・小学生（教員含む）、一般の方々への理解や関心の向上をより一層図るため、既存の社会資本や建設現場、入職者向けメディア等多様な媒体を活用した広報活動や観光と一体となった現場見学ツアー（インフラツーリズム）などの展開を図る予定である。

なお、関係機関において迅速な情報共有を図るため、メーリングリスト等による情報のワンストップ化を図ることを確認している。

8 おわりに

北陸建設界における将来の担い手不足への危機感から始まった本取り組みであるが、われわれ建設界にとって一番大事なのはやはり「人」であり、今後も、将来にわたる担い手確保に向けた取り組みはもとより、担い手の育成についても尽力していきたい。

普通高校・中学・小学校
（保護者や教員等含む）

建設系の高校等

建設系の大学等

マスコミ等と連携した情報発信が必要かつ効果的であり、認知と拡散には効率的

実際の現場を自分の目で見て、建設界の魅力、働く先輩方の頼もしさを体感する

協議会が連携し、座学から実習まで連続講座を開設し、建設界の魅力の深く知る

・現場見学、出前講座や教材配付など建設界への理解と魅力の拡散を図る

・新聞、テレビ等を活用し建設界の魅力を発信（インフラツーリズム等）

現場見学や実習等を通して、土木スケール感や先輩から魅力を直接聞く

1. 地域の物語講座
2. 反転授業（事前学習）
3. 現場見学
4. 校内・現地実習
5. 意見交換

インターンシップの充実

情報発信・情報共有（Webポータルサイト等）

図—3 協議会における取り組みの方向性